

9 横断的データにおける U 字型曲線の意味を探る

——継続年数と、結婚幸福度との間に認められる U 字型曲線に対して、
子供の存在の有無は影響力を持つか？——

土倉玲子

1 目的

結婚幸福度と、結婚継続年数との間に認められる関係に関しては、ライフサイクルに沿って、U 字型曲線を描くことが、アメリカの多くの研究において指摘されてきた。結婚幸福度は結婚当初は高く、結婚後約 5 年の間に大幅に低下し、その後約 10 年から 15 年に渡ってさらに緩やかに低下し、最低となる。そしてその後、再び緩やかに上昇する。これを、ライフサイクルに沿って言い代えると、家族の形成から第 1 子の出生を経て幸福度は低下し、子供が学齢期のころに最低になり、子供の離家によって再び上昇するという。このパターンは多くの研究で繰り返し見いだされたものであるため、第 1 子の出生に伴う幸福度の低下は親への移行 (transition to parenthood) の効果であるとされてきた。具体的には、子供の出生による夫婦の相互への関心の低下、子育てをめぐる夫婦間の紛争、反抗期の子供との親子関係がこうした事態を引き起こすとされてきた。しかし、継続年数と、結婚幸福度との間に認められる U 字型曲線関係が、親への移行に起因することを確認するためには、長期に渡る継続型データを使用する必要がある。最近では、本来、継続型データでなければ確認できない傾向を、横断型データを使って確認しようとする研究に対して、疑問を投げかける研究者も少なくない。Glenn (1990) は、彼のレビュー論文の中で、この疑問の根拠として、(1) (子供の有無に関わらず) 結婚初期に起こる幸福度の低下、(2) 対象サンプルの問題、(3) 各コーホートによる差異の 3 点を指摘している。第 1 点、(子供の有無に関わらず) 結婚初期に起こる幸福度の低下については、White & Booth(1985b) は、子供のいない夫婦を対象に 1 時点目 (1980 年) の調査を行い、2 時点目 (1983 年) に子供が生まれた夫婦、子供が生まれていない夫婦をそれぞれ層別して結婚幸福度の比較を行った。その結果、子供が生まれていても、いなくても、結婚幸福度が結婚後一定期間の後に低下することを見いだした。つまり、従来言われてきた親への移行の効果が、結婚継続期間の効果と交絡している可能性を示したのである。彼らは、子供がいない夫婦は結婚幸福度の低下によって離婚する可能性が相対的に大きく、幸福度の高いもののみが夫婦関係を存続する傾向があるのに対して、子供を持つ夫婦は結婚幸福度が低くとも離婚が控えられる傾向があり、この結果として結婚幸福度の低いものが多く観察される、という仮説を提示している。第 2 点の対象サンプルの問題とは、対象サンプルが closed ではないために、各結婚コーホートが古くなるにつれて、自分の結婚に不満を感じている人々が、離婚によって結婚から離脱してしまうことを意味している。第 3 点の各コーホートによる差異とは、各結婚コーホートごとに、幸福度と継続年数の間に異なった関係が見いだされる可能性があることを示している。このように、横断的データに認められる U 字型曲線関係を、家族ステージという視点から解釈する場合には、家族ステージ単独ではなく、家族ステージ以外の様々な要因と関連させて解釈を行う必要があることが指摘されてきている。

前述の Glenn による指摘に見られるように、横断的データを使って、U 字型曲線関係に

ついて研究を行うことについては、問題点が提示されてきているにもかかわらず、現在でも横断型データを使用した研究が多く見受けられる (Glenn, 1991; Orbuch, House, Mero, & Webster, 1996)。研究者が、横断型データを使用する理由としては、入手可能な継続型データの数が少ないことが挙げられるだろう。継続型データは、横断的データと比較して、(1) 歴史が浅い、(2) 長期にわたる追跡の間に脱落していくサンプルがある、(3) 経費がかかる、などの理由から、データ収集が困難であると思われる。

以上述べてきたような理由から、本報告書では、横断的データを使用して、U字型曲線関係を研究することの意味を問い直したい。特に、従来多くの研究において指摘されてきているところの、子供の存在の有無が、(横断型データに認められる) U字型曲線関係に対して持つ影響について、探索的に検討することを、本報告書では目的としている。

2 結果

2.1 分析の対象

NSFH(National Statistics of Family and Household) 87年版から、現在既婚で、未亡人ではなく、初婚が継続している(結婚回数が一回である)回答者を抽出した¹。

2.2 使用した変数

結婚幸福度：本研究の従属変数は、全体的結婚幸福度を問う7件項目である。具体的には、「ここにあなたの現在の結婚についての質問がいくつかあります。全てを考慮に入れた上で、あなたは現在の結婚について、どのように記述しますか？」のように尋ねている(1=非常に不幸である～7=非常に幸福である)。

結婚継続年数：調査年から、回答者の初婚の年を引いて算出した。

子供の数：実子の数を尋ねた変数を、「子供の有無」のダミー変数として使用した。

2.3 分析

まず最初に NSFH データにおいて、結婚幸福度と、継続年数との間に U字型曲線関係が認められるかどうかについて、検討を行った。表1に、結婚幸福度と、継続年数との関係をまとめ、図1にグラフ化し、さらに回帰曲線を示した。なお本報告書では、NSFH87年度版データに関しては、継続年数が35年以上のサンプルにおいて、結婚幸福度にほとんど変化が認められなかったため、サンプルを継続年数34年以下にしばって検討を行った($n=4195$)²。また、U字型曲線関係の存在を明らかに示すために、継続年数をプール(0-1,2-4,5-9,10-14,15-19,20-24,25-29,30-34)した。図1からは、NSFH データに関して、結婚幸福度と、継続年数との間に、U字型曲線が存在することが示されている。曲線関係が有意であるかどうかを確認するために、結婚幸福度と従属変数とし、継続年数の2乗項を入れた重回帰分析を行ったところ($n=4006$)、継続年数の2乗項は有意となった(継続年数 $\beta=-.40$, $t=-7.13$, $p<.01$; 継続年数の2乗項; $\beta=.39$, $t=7.04$, $p<.01$)。次に、データ

において認められた U 字型曲線関係が、子供の有無と関係しているかどうかについて検討するために、サンプルを、子供を持つ群と、子供を持たない群に分けて、それぞれにおいて、結婚幸福度と継続年数との関係を検討した。表 2 には、子供を持たない群と、子供を持つ群のそれぞれにおける、結婚幸福度と継続年数の間に認められる関係を示し、図 2 (2-a 子供を持たない既婚者、 2-b 子供を持つ既婚者) に同情報をグラフ化し、さらにその回帰式を示した。図 2 からは、子供を持つ群においても、持たない群においても、U 字型関係が存在することがわかる。この図 2 からは、特に子供を持たない群において、U 字型曲線の傾向が強いことが示されている。曲線関係が有意であるかどうかについて確認するために、継続年数の 2 乗項を含んだ重回帰分析を、それぞれのサンプルに対して行った結果、両方のサンプルにおいて、継続年数の 2 乗項の有意が確認された (子供を持たない群 $n=833$: 継続年数, $\beta=-.51$, $t=-4.62$, $p<.01$; 継続年数の 2 乗項, $\beta=.49$, $t=4.42$, $p<.01$: 子供を持つ群 $n=3172$: 継続年数, $\beta=-.22$, $t=-3.29$, $p<.01$, 継続年数の 2 乗項, $\beta=.26$, $t=3.84$, $p<.01$)。このように、子供を持つ群にも、子供を持たない群にも、U 字型曲線関係が認められたので、次に、「子供の有無」をコントロールした時に、U 字型曲線にどのような変化が認められるかについて、検討を行った。図 3 に示したのは、NSFH データにおいて、初婚の続いている全既婚サンプルについて、「子供の有無」をコントロールする前と、後の回帰曲線である。図 3 からわかるように、「子供の有無」をコントロールしても、U 字型曲線関係は残ることが示されている。最後に、性別³、及び「子供の有無」の影響について検討するために、全サンプルを 4 分 (子供を持たない夫、子供を持つ夫、子供を持たない妻、子供を持つ妻) して、U 字型曲線関係について検討を行った。表 3 及び表 4 に、4 分したそれぞれのサンプルにおける、結婚幸福度と継続年数との関係を示し、図 4 (4-a 子供を持たない夫、4-b 子供を持つ夫、4-c 子供を持たない妻、4-d 子供を持つ妻) に同情報をグラフ化し、さらに回帰曲線を示した。次に U 字型曲線関係が有意であるかどうかを確認するために、4 分されたサンプルにおいて、継続年数の 2 乗項を含んだ重回帰分析を行った結果、それぞれのサンプルで、継続年数の 2 乗項は有意となった (子供を持たない夫 $n=416$; 継続年数, $\beta=-.51$, $t=-3.19$, $p<.01$, 継続年数の 2 乗項, $\beta=.51$, $t=3.23$, $p<.01$; 子供を持つ夫 $n=1380$; 継続年数, $\beta=.19$, $t=-1.85$, ns , 継続年数の 2 乗項, $\beta=.24$, $t=2.27$, $p<.05$; 子供を持たない妻 $n=416$; 継続年数, $\beta=-.52$, $t=-3.33$, $p<.01$; 継続年数の 2 乗項, $\beta=.47$, $t=3.04$, $p<.01$; 子供を持つ妻 $n=1791$; 継続年数, $\beta=-.24$, $t=-2.76$, $p<.01$, 継続年数の 2 乗項 $\beta=.28$, $t=3.12$, $p<.01$)。図 4 は、4 分された、どのサンプルにおいても、U 字型曲線関係が存在することを示している。また図 4-a 及び図 4-c からは、子供を持つ夫や妻と比較した時に、特に子供を持たない夫や妻において、U 字型曲線関係が顕著であることがわかる⁴。ただし、子供を持たないサンプルにおいて U 字型曲線関係が顕著であるという結果は、結婚継続 10 年以上で子供を持たないサンプルの数の不足(表 2) から、明確に結論することはできない。以上の結果から、子供の有無や性をコントロールしても、U 字型曲線関係が残ることが示された。この結果は、子供を持つことによって結婚幸福度が下がり、その幸福度の低下が U 字型曲線関係に影響を及ぼしている可能性は存在するが、子供の有無のみが原因ではないことを示している。

3 考察

本報告書の分析結果からは、子供の有無は、U字型曲線関係に影響を与えている、ひとつの要因ではあるが、子供の有無のみで、U字型曲線関係を説明することは不可能であることが明らかになった。U字型曲線関係に影響を与えている、他の要因については、本報告書で行った分析から明確な結論を出すことはできない。しかし、子供を持たないサンプルにおいてU字型曲線関係の傾向が強いという分析結果は、U字型曲線関係についてより深い考察を行う時に、何らかの手がかりを与えてくれる可能性を持っている。将来においては、長期に渡る継続型データの入手を待って、横断型データを、継続型データと比較することによって、横断型データに認められるU字型曲線関係について、より詳しい考察を行いたい。

表1 初婚継続者全体が感じている結婚幸福度と、結婚継続年数

結婚継続年数	結婚幸福度平均	サンプルの数
0-1	6.19 (1.21)	365
2-4	6.02 (1.17)	685
5-9	5.88 (1.28)	848
10-14	5.77 (1.36)	569
15-19	5.79 (1.37)	567
20-24	5.80 (1.37)	357
25-29	5.96 (1.34)	296
30-34	6.13 (1.20)	316
Total	5.92 (1.29)	4003

注：() は標準偏差

表2 結婚幸福度平均と結婚継続年数：子供を持つ既婚者 vs.子供を持たない既婚者

結婚継続年数	子供を持たない既婚者が感じている結婚幸福度平均	サンプルの数	子供を持つ既婚者が感じている結婚幸福度平均	サンプルの数	結婚幸福度：子供を持たない既婚者 vs.子供を持つ既婚者
0-1	6.32 (1.10)	255	5.88 (1.41)	110	.44**
2-4	6.17 (1.11)	287	5.92 (1.20)	398	.25**
5-9	6.06 (1.15)	129	5.84 (1.30)	719	.22
10-14	5.86 (1.41)	43	5.76 (1.35)	526	.10
15-19	5.88 (1.38)	48	5.78 (1.38)	519	.10
20-24	6.00 (1.20)	29	5.79 (1.39)	328	.21
25-29	6.28 (.85)	21	5.93 (1.37)	275	.35
30-34	6.63 (.96)	19	6.10 (1.21)	297	.53†
Total	6.18 (1.14)	834	5.86 (1.32)	3173	.32*

注：() は標準偏差

† $p < .07$; * $p < .05$; ** $p < .01$

表3 夫が感じている結婚幸福度平均と、結婚継続年数：子供を持たない夫 vs.子供を持つ夫

結婚継続年数	子供を持たない夫が感じている結婚幸福度平均	サンプルの数	子供を持つ夫が感じている結婚幸福度平均	サンプルの数	結婚幸福度：子供を持たない夫 vs.子供を持つ夫
0-1	6.35 (1.00)	132	5.84 (1.48)	32	.51
2-4	6.15 (1.13)	143	5.94 (1.19)	171	.22
5-9	5.98 (1.14)	66	5.82 (1.37)	331	.17
10-14	6.00 (1.08)	20	5.85 (1.30)	230	.15
15-19	6.32 (.78)	22	5.75 (1.42)	215	.56**
20-24	5.93 (1.00)	14	5.80 (1.35)	155	.13
25-29	6.10 (.99)	10	6.03 (1.37)	120	.07
30-34	7.00 (.00)	8	6.08 (1.30)	126	.92**
Total	6.20 (1.06)	417	5.87 (1.34)	1381	.33**

注：() は標準偏差

** $p < .01$

表4 妻が感じている結婚幸福度平均と、結婚継続年数：子供を持たない妻 vs.子供を持つ妻

結婚継続年数	子供を持たない妻が感じている結婚幸福度平均	サンプルの数	子供を持つ妻が感じている結婚幸福度平均	サンプルの数	結婚幸福度：子供を持たない妻 vs.子供を持つ妻
0-1	6.30 (1.19)	123	5.90 (1.39)	78	.40*
2-4	6.18 (1.09)	144	5.90 (1.20)	227	.28*
5-9	6.14 (1.16)	63	5.87 (1.23)	388	.28
10-14	5.74 (1.66)	23	5.69 (1.39)	296	.05
15-19	5.50 (1.66)	26	5.79 (1.34)	304	.29
20-24	6.07 (1.38)	15	5.77 (1.43)	173	.29
25-29	6.45 (.69)	11	5.86 (1.36)	155	.60
30-34	6.36 (1.21)	11	6.12 (1.14)	171	.25
Total	6.16 (1.22)	417	5.85 (1.31)	1792	.31**

注：() は標準偏差

* $p < .05$; ** $p < .01$

図1 NSFH データにおける初婚継続者が感じている結婚幸福度と、結婚継続年数

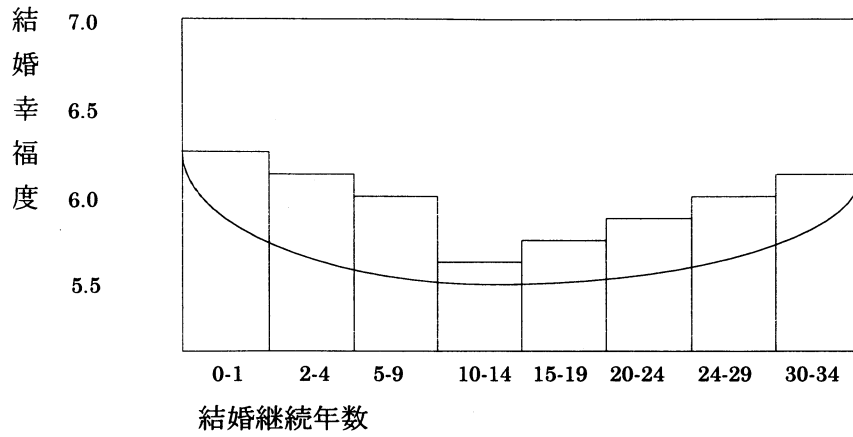


図2 結婚幸福度と、結婚継続年数—子供の有無による差異

図 2-a 子供を持たない既婚者

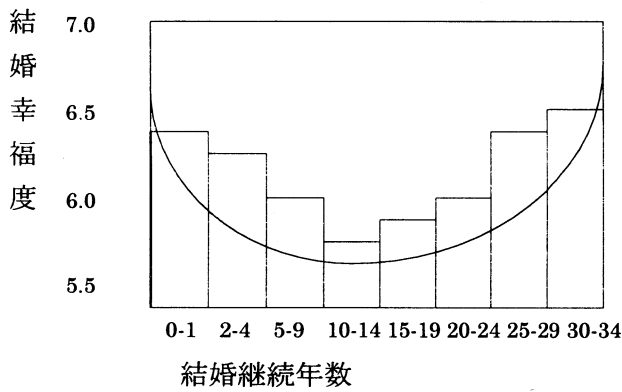


図 2-b 子供を持つ既婚者

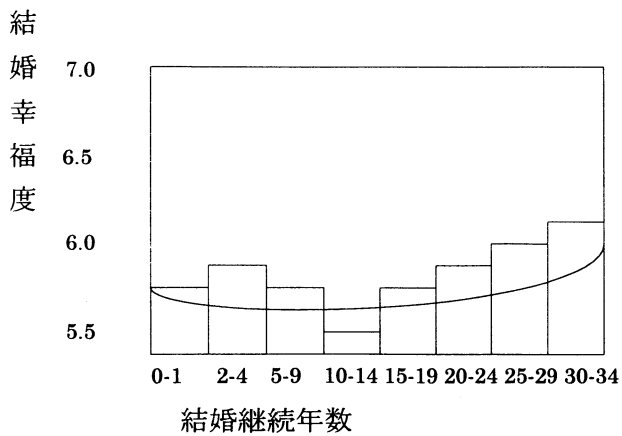


図3 回帰曲線
「子供の有無」をコントロールする前と後

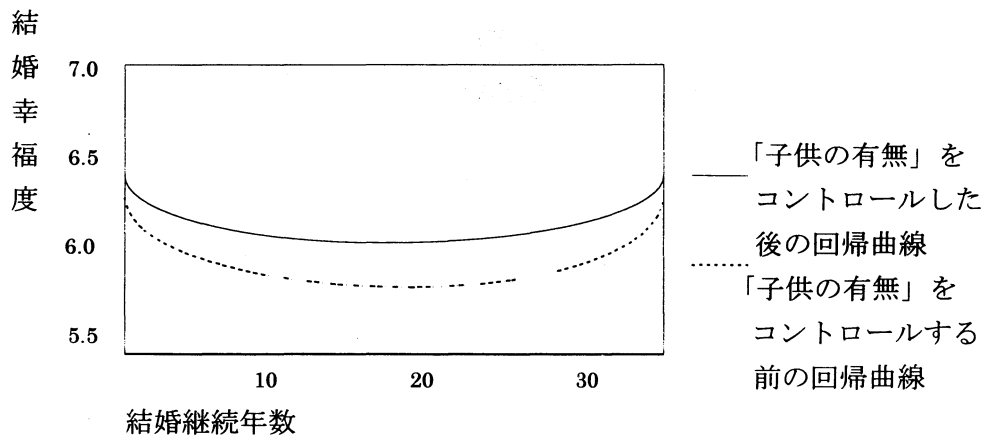


図4 子供の有無、及び男女別に見た結婚幸福度と、結婚継続年数

図4-a 子供を持たない夫

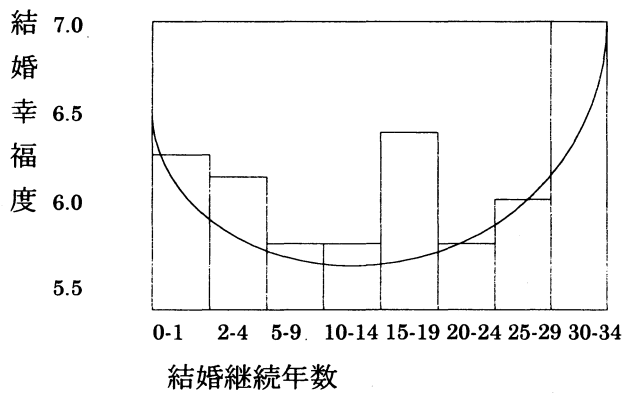


図4-b 子供を持つ夫

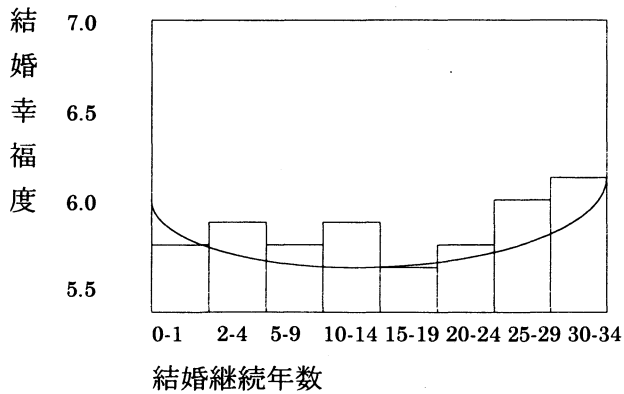


図 4-c 子供を持たない妻

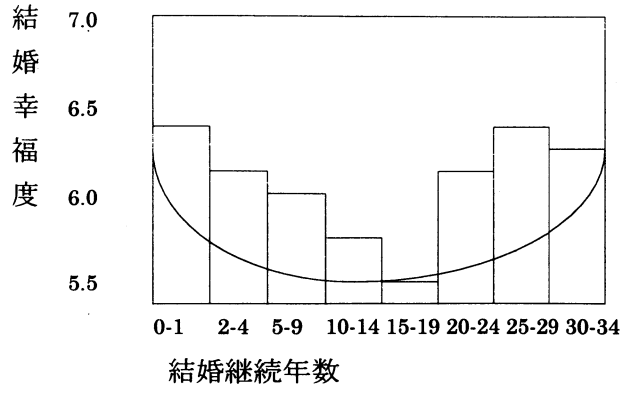
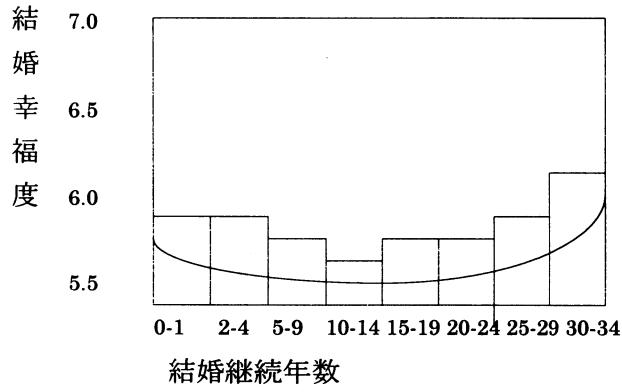


図 4-d 子供を持つ妻



脚注

注1 本報告書で分析の対象としたのは、マイナー事例を増やすためにとられた上積みサンプルを含んだ中から抽出したサンプルである。

注2 本報告書で、分析対象となったサンプルが、NSFH87年度版全データに占める位置は下記の通りである。

NFSH全サンプル数	13,008
全サンプルのうち 未亡人ではない現既婚者	6,877 (全サンプルに占める割合 53%)
全サンプルのうち未亡人ではない 現既婚者で、初婚継続者	5,306 (全サンプルに占める割合 41%)
全サンプルのうち未亡人ではない 現既婚者で、初婚継続者、かつ結婚 継続機関が3-4年以下の者	4,195 (全サンプルに占める割合 32%)

注3 本報告書では、横断的データにおいて、結婚継続年数と結婚幸福度との間に認められるU字型曲線関係について、探索的に検討することを目的のひとつにしている。この探索的な目的にしたがって、結婚継続年数と結婚幸福度との間の関係が、夫と妻において異なっているかどうかについて検討を行った。下記の表は、夫と妻それぞれにおける、結婚継続年数と結婚幸福度との関係をまとめたものである。

結婚継続年数と結婚幸福度平均：夫 vs. 妻

結婚継続年数	夫が感じている結婚幸福度		妻が感じている結婚幸福度		結婚幸福度： 夫 vs. 妻
	平均	サンプルの数	平均	サンプルの数	
0-1	6.25 (1.12)	164	6.14 (1.29)	201	.11
2-4	6.04 (1.17)	314	6.01 (1.17)	371	.03
5-9	5.84 (1.33)	397	5.90 (1.23)	451	-.06
10-14	5.86 (1.28)	250	5.69 (1.41)	319	.17
15-19	5.81 (1.38)	237	5.77 (1.37)	330	.04
20-24	5.81 (1.32)	169	5.80 (1.43)	188	.01
25-29	6.04 (1.34)	130	5.90 (1.33)	166	.14
30-34	6.13 (1.28)	134	6.13 (1.14)	182	.00
Total	5.95 (1.29)	1798	5.90 (1.30)	2209	.05

注：() は標準偏差

上記の表から、夫と妻のそれぞれにおいて、結婚継続年数と結婚幸福度との間にU字型曲線関係が認められることがわかる。この曲線関係が有意であるかどうかについて検討を行うために、継続年数の2乗項を含んだ重回帰分析を行ったところ、夫と妻のそれぞれについて、継続年数の2乗項は有意となった(夫 $n=1797$: 継続年数, $\beta = -.40$, $t = -4.73$, $p < .01$; 継続年数の2乗項, $\beta = .40$, $t = 4.72$, $p < .01$; 妻 $n=2208$: 継続年数, $\beta = -.40$, $t = -5.33$, $p < .01$, 継続年数の2乗項, $\beta = .39$, $t = 5.23$, $p < .01$)。次にプールした継続年数カテゴリーのそれぞれに関して、夫と妻のそれ

それが感じている結婚幸福度に差異があるかどうかについて検討を行った結果、どの継続年数カテゴリー内においても有意な差異は認められなかった。

- 注4 子供を持つサンプルと、子供を持たないサンプルの間には、U字型曲線関係の程度の違いだけでなく、結婚幸福度そのものにおいても差異が認められる。夫においても、妻においても、全体として、子供を持たないサンプルが感じている結婚幸福度の方が、子供を持つサンプルが感じている結婚幸福度より高い（表3及び表4）。しかし、この傾向はどの継続年数カテゴリーについても一貫して認められるわけではない。特に、夫に比べて、子供の存在の影響を強く受けるとされる妻に関して、子供を持つ者と持たない者との間に差異が認められるのは、結婚当初の4年まででその後において、差異は見あたらない。しかし一方子供の存在が、妻が感じている結婚幸福度に対して、負の影響を及ぼしているという結果を示している研究もある。たとえば Rogers(1996)は、妻が雇用されている場合、子供の数が多いほど、結婚幸福度も低い傾向が認められたとしている。

引用文献

- Campbell, A. Converse, P. E., & Rodgers, W. L., 1976, The Quality of American Life: Perceptions, Evaluations, and Satisfaction, Russel Sage Foundation.
- Glenn, N. D., 1990, "Quantitative Research on Marital Quality in the 1980s: A Critical Review," Journal of Marriage and the Family, 52, 818-831.
- Glenn, N. D., 1991, "The Recent Trend in Marital Success in the United States," Journal of Marriage and the Family, 53, 261-270.
- Levenson, R. W., Carstensen, L. L., & Gottman, J. M., 1993, "Long-Term Marriage: Age, Gender, and Satisfaction," Psychology of Aging, 8, 301-313.
- Orbuch, T. L., House, J. S., Mero, R. P., & Webster, P. S., 1996, "Marital Quality Over the Life Course," Social Psychology Quarterly, Vol. 59, No. 2, 162-171.
- Rogers, S. J., 1996, "Mothers' Work Hours and Marital Quality: Variations by Family Structure and Family Size," Journal of Marriage and the Family, 58, 606-617.
- Veroff, J., Douvan, E., & Kulka, R. A., 1981, The Inner American: A Self-Portrait from 1957 to 1976, Basic Books.
- White, L. K., & Booth. A., 1985b, "Transition to Parenthood and Marital Quality," Journal of Family Issues, 6, 435-450.

④

重点領域研究「ミクロ統計データ」・公募研究（課題番号08209118）

「家族構造の国際比較のための基礎的研究－公共利用マイクロデータの作成と活用－」

平成8年度研究成果報告書（1）

公共利用マイクロデータの活用による 家族構造の国際比較研究

－米国NSFH調査データの利用を通して－

1997年3月

研究代表者 石原邦雄
（東京都立大学）